

## 【天気予報及び概況】

※気温については、1ヶ月の平均値(気象庁)

天気は数日の周期で変わりますが、平年に比べ晴れの日が多いでしょう。  
気温は、高い確率50%です。降水量は、平年並または少ない確率ともに40%です。

	平均気温(°C)	最高気温(°C)	最低気温(°C)	降水量(mm)
2024年	9.2	13.4	5.4	137.0
2023年	11.5	16.5	7.0	75.0
2022年	10.7	15.5	6.4	98.0
1991~2020年	9.3	13.6	5.2	94.9

## 【作物】

## 1 麦

## (1) 穂肥

施肥時期は、11月中・下旬播種のシロガネコムギで出穂前30~25日(3月上旬頃)、ハルヒメボシで出穂前30~25日(3月上旬頃)頃が適期です。  
施肥量は、葉色と生育量(草丈、茎数)を見て、化成444を15~20kg/10a施用してください。

## (2) 排水溝の点検

春先の降雨による根傷みは、収量や品質を大幅に低下させる原因となります。排水溝の点検・作溝を行い、雨水の排出促進に努めて、湿害を防止してください。特に、排水溝は必ず圃場の外まで導いて、雨水を排出してください。

## (3) 赤かび病の防除

赤かび病は開花から約10日間が最も感染しやすく、この時期に温暖(気温15°C以上)で連続降雨があると発生が多くなります。そのため、防除適期は開花期(通常、出穂期の5~7日後)で、この時期の防除は必ず実施してください。

また、1回目の防除後も温暖多雨で多発が予想される場合には、7~10日後に2回目の防除が必要です。薬剤は、1回目は小麦・裸麦ともトップジンM水和剤1,000~1,500倍、2回目は小麦はトップジンM水和剤、裸麦はトリフミン水和剤1,000~2,000倍を散布してください。

## 2 水稻(雑草の総合防除)

難防除雑草のオモダカ、コウキヤガラ等は単一除草剤の一時期処理では完全に防除することは困難で、耕種的な防除(水稻収穫後の水田の排水による乾田化や冬期耕起、畦畔の除草等)と除草剤の体系処理を組み合わせる総合的な防除を繰り返すことが大切です。 <桐野>

## 【野菜】

## 1 さといも

## (1) 種芋消毒

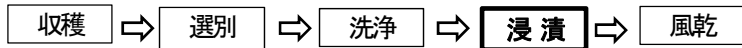
安定・高品質生産のために、種芋消毒を実施してください。

## ア 農薬名

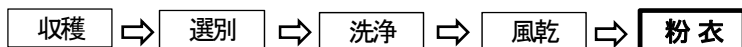
農薬名	病害名	使用方法及び注意事項
ベンレートT水和剤20	黒斑病 疫病	○ 植付前 20倍 1分浸漬 または、 ○ 種芋重量 0.4~0.5% 種子粉衣 種芋200kgの場合、薬剤800~1,000g粉衣

## イ 消毒方法

## ①種芋浸漬



## ②種芋粉衣



## ウ 処理のポイント

収穫…種芋を確保する圃場は、疫病・乾腐病・軟腐病の発病が少ない圃場や1月の低温被害のない圃場から収穫・採種してください。

選別…病気と凍害のない株から劣化・腐敗していない種芋(200~250kg/10a)を、子芋と孫芋に選別します。種芋を十分検査し、**かざり口が赤くなっている芋は使用しないでください。**

洗浄…種芋の表面に土が付着していると、消毒液が種芋に付着しないので、水で洗浄して土を落としてください。

浸漬…種芋を20倍・1分浸漬後良く乾かしてください。

粉衣…種芋重量の0.4~0.5%の薬剤が均一に付着するよう少量ずつ粉衣してください。

## エ 注意点…種芋浸漬・粉衣を行う場合、必ずマスクを着用してください。

## (2) 植付け準備~植付け作業

ア 畝立ては畝幅110~115cmで、土入れ時に畝の上に土がしっかり乗るように整形してください。停滞水のないように排水対策を実施してください。

イ マルチングは、畝に**適度な水分**がある状態で、黒マルチを被覆します。

ウ 植付けは、株間30~35cm、深さ15cmとしてください。

## (3) 害虫対策

ア コガネムシ類幼虫の被害が多い圃場は、必ず植付け前にダイアジノンSLゾル(50倍、1000/10a)を散布し、速やかに土壌混和してください。

イ アブラムシ類対策で、植付け時にアドマイヤー1粒剤(4kg/10a)または、アクタラ粒剤5(6kg/10a)を植溝に土壌混和します。

## (4) 施肥

『令和7年度JAうま里芋全期マルチ栽培施肥設計』を参考に、施用してください。 <徳永>

## 2 やまのいも

## (1) 種芋準備・消毒

ア 無病で優良な種芋(200~250kg/10a)を準備してください。

イ 蔓首を切り除き、1個切片芋が50g程度になるように切断します。

ウ 種子消毒は、青かび病対策のためにバルコートフロアブル(200倍、10分間浸漬)します。その後、種芋1個片50g程度に切りベンレートT水和剤20と消石灰を混和し粉衣(消石灰10kg、ベンレートT水和剤20500g)します。

## (2) 植付け

2条植えは、畝幅110~125cm・株間33~40cmの2条千鳥植え。

1条植えは、畝幅100~110cm・株間25~30cm。

## (3) 高品質栽培(中玉生産による秀品率向上を目指した栽培方法)

【目標株数約6,000株/10a】

2条植え 畝幅110~125cm・株間26~30cmの2条千鳥植え。

※種芋は無病で丸い中玉を1片25~30g程度に切断する(10a当たり180kg程度)。

## (4) 害虫対策

ア コガネムシ類幼虫の被害が多い圃場は、必ず植付け前にダイアジノンSLゾル(25倍、1000/10a)を散布し、速やかに土壌混和します。

イ ネキリムシ類対策で、植付け時にフォース粒剤を6kg/10aを植溝に土壌混和します。 <可部>

## 【果樹】

## 1 せん定

## (1) 温州みかん

高品質な果実を着果させるために亜主枝は水平からやや下向きに配置し、側枝や結果母枝は込み合った部分の立ち枝を基から間引いて柔軟な樹形を目指します。

結果母枝が多く着花が多いと予想される樹は、せん定は早めに行い、発芽までには終わるようにします。切返しや予備枝を設定し、春枝(発育枝)と着花量のバランスを整えます。

昨年産の着果が多く、結果母枝が少ない樹は、せん定の実施は遅めで程度は軽く、着花確保に努めてください(着花確認後の軽いせん定でも可)。

## (2) 中晩柑類

樹勢を保ち、樹冠内部まで日が当たるように独立樹を目指します。

同年枝や競合枝の整理、亜主枝上の立ち枝・下垂枝の除去、外に伸びすぎた枝の追い込みなど、樹の骨格を整えます。また、樹勢が低下している場合は、切返しせん定で強めの新梢の発生を促します。

## 2 春肥

春肥は、新梢の充実、開花結実促進、幼果肥大に不可欠なため、発芽前にしっかりと施します。なお、有機率が高い肥料の場合は、やや早めに施用してください。

## 3 病害虫防除

マシン油乳剤の散布は、発芽前の3月中旬頃までに実施してください(但し、厳寒日は散布しない、冬期に2度散布しない)。散布濃度は95%製剤45倍(樹勢が弱い樹では97%製剤60倍が適当)ですが、商品により登録内容が異なるので使用時に農薬ラベル表示を必ず確認してください。

かいよう病に弱い甘平等の品種では、せん定時に罹病した枝葉を除去し、園外へ搬出して処理します。また、発芽前までにICボルドー66D 40倍(マシン油乳剤を散布する場合は2週間以上空ける)を散布してください。 <可部>

## 【花き・花木】

## 1 シキミの定植

日当たりと排水の良い圃場を選び、pH5.5~6.0の弱酸性土壌にしておきます(苦土石灰60kg/10a)。直径60cm×深さ30cm程度の穴を掘って根を広げ、根の間に土が入るように定植します。栽植密度は40~50本/a(株間120~150cm×条間150cm)です。この際、アドマイヤー1粒剤(4kg/10a)を土壌混和しておくコガネムシ対策になります。

## 2 シキミの防除・施肥

3月下旬にダイリグ粒剤(12kg/10a)を株元散布し、アブラムシおよびゲンバムシを防除します。高度化成肥料14-14-14(20kg/10a)を施用します。施肥により濃い色の葉や葉量を多くしますが、施肥量が多すぎると節間が伸び、大葉となり、商品価値を落としますので、ほ場や生育状況により加減してください。

## 3 アネモネ・ランタンキュラスの摘花

球根を肥大させるため、花はすべて摘花し、圃場の外に出します。 <佐津間>

## 【畜産】

耕種農家が堆肥を圃場に入れる時期です。

農家に求められる**完熟堆肥を作るためのポイント**は、適度な水分に調整して好気性菌が十分活動ができる点にあります。

家畜生糞の水分は一般に75~85%あり、そのままでは発酵が進まないため、水分の少ないオガクズやもみガラ、戻し堆肥などの資材を加えて水分を調整する必要があります。

**堆肥舎に堆積するスタート時点の調整生糞の目標水分は、70%前後がベスト**です。水分調整の目安は以下を参考にしてください。

<生糞の水分を70%にするための資材の必要量>

生糞の水分	生糞1tに混ぜる水分調整資材の必要量	
	オガクズ(水分25%)のみ	戻し堆肥(水分60%)のみ
75%	111kg(約1/10の量)	500kg(約半分量)
80%	222kg(約1/4の量)	1,000kg(約同量)
85%	333kg(約1/3の量)	1,500kg(約1.5倍量)

※調整後の生糞を10Lバケツにすりきり一杯入れた重量が、5~7kg程度になれば適正水分です。

堆肥の発酵が進むのは堆積した表面に近い数十センチ程度の部分であり、空気の届かない深層部では発酵が進みません。堆肥全体がまんべんなく完熟するためには、**定期的な切り返し**が必要で、切り返し後60°C以上の発酵温度を維持する必要があります。堆肥の切り返し作業は、**最初3回は1週間おき、4回目以降は2週間おきに行うのが最も効果的**です。 <平野>